

科目名	担当者名	開講学期	単位
英語教育法特殊研究	マクマレイ・デビッド	前期	2

ナンバリングコード

D_INT613750

使用言語

英語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

英語教育をするにあたっての、アプローチ法や理論・実践について学び、指導要領を作成する。

This doctoral-level course in English education methodology therefore provides a forum for participants to discuss, evaluate, and demonstrate their knowledge and capabilities in the conducting of research, English language skills, and pedagogic expressiveness. This course is designed to train highly skilled researchers and educators in English, and on English pedagogy. In this English education methods special topics research course, students can research the theory and teaching practice of various approaches, methods, strategies, techniques and classroom lesson planning for learning and teaching English as a foreign language.

概要

英語を教育する際に行われる主なアプローチ法を学ぶ。現在、国際俳句・詩などを用いて英語を教授する方法が英語教育では用いられている。英語を教授する際、実際使用されている教授法や従来使用されてきたアプローチ法や理論・実践について学ぶ。多様な教授法・理論を学習した後、自ら英語教育のできるスキルを身につけ、大学にて教育実習を行う。英語を教授する際、多くの教授法から一つを選択することは不可能である。授業により、今後どのような英語教育が行われていくべきなのか共に考え、教育現場に応用できる柔軟性を習得する。

The main approaches and methods for learning and teaching English are discussed, observed, analyzed, practiced, evaluated, and improved. Opportunity to teach international understanding in English to elementary school teachers is arranged. Teaching Assistant and practicum teaching are performed in university classrooms and the university ESS club. Additional opportunities are provided for teaching international haiku poetry, business English and other special topics of interest to participants.

キーワード

TOEIC, English, Haiku, Workshop, Writing, Active Learning

授業の到達目標

In this doctoral level course, participants are expected to contribute to knowledge about special topics in English through writing and presentations. It is not enough to simply report what others in the field have done and written. Participants in this class are expected to critically analyse the literature and to take a stance, expressing their own voices by challenging existing claims, concepts and theories.

授業計画

第1回:教育現場で活躍している卒業生や大学の教員の現場の様子を見聞する Action research. English pedagogy and sociolinguistic approaches to the essence of the foreign language learning process are explored.

第2回:英語はどここの国(アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリア)のものだったか? Students are asked to raise issues related to language and culture, coined words and dialects.

第3回:コミュニケーション中心の英語教育法について Communicative Language teaching methods

第4回:ケーススタディ～バイリンガル教育 Case study of bilinguals

第5回:文学を用いた英語教授法について Literature methodology

第6回:英語における俳句作り方研究および国際俳句を用いた英語教授法について Teaching international haiku

第7回:英語教育がどのように行われているのかクローズアップする。

第8回:授業のフィードバック並びに英語文学を用いて要約の作成法を習得するFeedback

第9回:オーディオリンガルメソッド(リスニング・スピーキング)を用いた英語教授法について The audio lingual method

第10回:直接法を用いた英語教授法について English Language Teaching using direct learning methods

第11回:教授法を活用し、模擬授業の準備・練習 Prepare and practice a trial lesson.

第12回:教室でのテクニック方法を用いた授業 Selecting techniques for a lesson

第13回:学習テクニックを用いた授業 Practicum

第14回:学習テクニックを用いた授業 Practicum

第15回:学習のまとめ. 定期試験:レポートに替える The conclusion of study with an examination requiring participants to prepare, present and discuss a report on a special topic in English education.

授業の予習・復習

Participants will be able to role-play a teacher, a student, a TA.

使用教材

McMurray, David. (2001). J-Talkのための実用ティーチング・ガイドオックスフォード大学出版局Tokyo: Oxford University Press.

McMurray, David. (2003). Teaching English as an International Language (Sandra Lee McKay) Reviewed by David McMurray. JALT Journal (25)2, p.224-225.

McMurray, David. (2013). Canada Project Collected Essays & Poems. The International University of Kagoshima. 2,000円(税込)

McMurray, David. (2014). Asahi Haikuist Network / David McMurray. Retrieved from <http://ajw.asahi.com/search/?q=mcmurray>

Richards, J. & Rodgers. (2001). Approaches and Methods in Language Teaching, 2nd Edition. Tokyo: Cambridge University Press.[Online publication July 2010] 2,920円(税込)

評価方法

学生に対する評価授業への取り組み、課題レポートの内容等をもとに、総合的に評価する。100% Evaluation is based on the final report, presentations, practicum and discussions.

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィス・アワー授業時間外の対応については、授業時に指示する。授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

オフィスアワー(月曜日 9:10~10:10)には会議等がない限り研究室にいますので、アポイントなしで顔を出してもらってかまいません。

前年度の授業評価

国民文化祭が今年鹿児島で開かれました。そこで、国際俳句のシンポジウムがあり、学生が参加しました。事前に学生は英語で木に関する俳句を書きました。また、前文部大臣であった有馬博士の講演を学生が聴きました。学生は去年有馬博士と会い、親睦を深めました。また、毎週授業後、ESS(英語討論部)というサークルで英

語に関して助言を他の学部生にしておりました。

科目名	担当者名	開講学期	単位
対照言語学特殊研究	戦 慶勝	後期	2

ナンバリングコード

D_INT618010

使用言語

日本語, 中国語

授業形態

論文・研究指導

テーマ

日本語と中国語に関する対照研究

概要

言語の対照研究は第二言語教育に有用である。言葉の対照研究は主に、①言語教育のための研究、②言語研究のための研究、③言語翻訳のための研究のように分けられる。言語研究のための研究の目的は、同じ意味を表す言語間の表現手段を対照し、そのずれを明らかにすることによって、片方、または両方の言語の記述や説明を新しくすることにある。また、研究している言語の現象を複数の言語のそれと対照することによって、当該現象に対する認識を深めることにある。この授業では、言語教育のための研究、言語研究のための研究、言語翻訳のための研究、の三つの視点に立って言葉について考える。

キーワード

言語学的研究、習得研究、意味的側面、統語的側面、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

対照研究の視点から日本語と中国語にまつわる諸現象を分析する能力を身に着ける。

授業計画

- 第1回 対照言語学の理論と方法 I
- 第2回 対照言語学の理論と方法 II
- 第3回 形態素・語・文・複文
- 第4回 音韻の対照分析
- 第5回 語彙の対照分析 I
- 第6回 語彙の対照分析 II
- 第7回 語彙の対照分析 III
- 第8回 意味の対照分析 I
- 第9回 意味の対照分析 II
- 第10回 意味の対照分析 III
- 第11回 語用的意味の対照分析
- 第12回 統語の対照分析 I
- 第13回 統語の対照分析 II
- 第14回 統語の対照分析 III
- 第15回 提出のレポートに基づいて研究発表をさせる

授業の予習・復習

配布資料を必ず読んでおくこと。教員のコメントを整理しておくこと。

使用教材

参考文献:①戦 慶勝(2003)「中国語に姿・日本語の姿」高城書房
②渡辺 実(1996)「日本語概説」岩波テキストブックス
③益岡 隆志(2007)「日本語モダリティ探求」くろしお出版
④石綿 敏雄・高田 誠(1998)「対照言語学」おうふう
⑤戦 慶勝(2016)「中国語と日本語における目的表現の対照研究」白帝社

評価方法

レポートと研究発表(特に学会発表)などに基づいて総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

言語学に関する修士レベルの知識を持っていない場合は履修することができない。質問等あればいつでも対応する。

前年度の授業評価

受講生がいなかったため、実施しなかった。

科目名	担当者名	開講学期	単位
欧米語学特殊研究 I (英文学)	飯田 敏博	後期	2

ナンバリングコード

D_INT619300

使用言語

日本語(テキストは英語)で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

イギリスの劇作家バーナード・ショーの戯曲を講読・研究することで、イギリス近代劇の特性を把握する。

概要

バーナード・ショーの戯曲の中でも、英雄・聖者を描く作品を複数取り上げ、検討することでショーの世界観を研究する。

キーワード

戯曲、バーナード・ショー、英文講読、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

イギリスの劇作家バーナード・ショーの戯曲を講読・研究することで、イギリス近代劇の特性を把握する。

授業計画

- 第1回 イギリス近代劇について
- 第2回 バーナード・ショーについて
- 第3回 シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』、『アントニーとクレオパトラ』
- 第4回 ショーの戯曲『シーザーとクレオパトラ』第1幕、第2幕
- 第5回 戯曲『シーザーとクレオパトラ』第3幕、第4幕
- 第6回 戯曲『シーザーとクレオパトラ』第5幕
- 第7回 戯曲『シーザーとクレオパトラ』研究論文講読
- 第8回 戯曲『シーザーとクレオパトラ』批評
- 第9回 ショーの戯曲『運命の人』講読
- 第10回 戯曲『運命の人』批評
- 第11回 戯曲『聖女ジョウン』第1場、第2場
- 第12回 戯曲『聖女ジョウン』第3場、第4場
- 第13回 戯曲『聖女ジョウン』第5場、第6場
- 第14回 戯曲『聖女ジョウン』エピローグ、批評
- 第15回 まとめ

提出されたレポートは添削します。

授業の予習・復習

指示された英文テキスト、研究書をしっかり読み込んでくること。

使用教材

テキスト: Bernard Shaw, "Caesar and Cleopatra"

"The Man of Destiny"

"Saint Joan"

評価方法

平常点 50%、レポート 50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業で適宜指示する。オフィス・アワーについても受講生と協議をして時間設定する。

前年度の授業評価

履修学生がいなかったため開講せず。

科目名	担当者名	開講学期	単位
欧米語学特殊研究Ⅱ(南ヨーロッパ比較言語学論)	杉山 朱実	前期	2

ナンバリングコード

D_INT618010

使用言語

日本語、ヨーロッパ言語、バスク語

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ヨーロッパにおける言語研究

概要

アンドレ・マルティが「祖語への追跡研究ではなく言語そのものへの視点から言語機能への解明をすべし」との研究方針を示し、以後、「語彙素」と「文法素」という概念が、ひとつの単語の中に置かれている屈折言語と膠着言語との構造分析を、的確に解説できるようになった。このような言語学的影響関係がいかにあるのか、言語機能の視点から検討し、学習する。

毎回、講義のあとレポート提出をかす。その後添削指導で返却されたレポートをもとに、ディスカッションを重ね、講義内容の把握を確実なものとしていく。

毎回、添削のうえ返却後、意見を出し合い検討しあい、フィードバックしていく。

キーワード

構造言語学、機能主義、膠着言語、孤立言語、屈折言語とうの言語形態
アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

修士論文で仕上げてきた言語研究における「各自のテーマ」から、関連するヨーロッパにおける言語研究の、さらなる真摯な研究向上を目指して、より専門分野に深く知識を広めていくことを目標とする。

授業計画

- 第一回 印欧諸語の分類(1)
- 第二回 印欧諸語の分類(2)
- 第三回 印欧諸語の分類(3)
- 第四回 南ヨーロッパにおける言語分類(1)
- 第五回 南ヨーロッパにおける言語分類(2)
- 第六回 南ヨーロッパにおける言語分類(3)
- 第七回 オック語の分類(1)
- 第八回 オック語の分類(2)
- 第九回 バスク語の分類(1)
- 第十回 バスク語の分類(2)
- 第十一回 バスク語の軍類(3)
- 第十二回 影響関係の分析(1)
- 第十三回 影響関係の分析(2)
- 第十四回 研究発表準備
- 第十五回 研究発表

授業の予習・復習

毎回の講義で出される課題に真摯に取り組むことはもちろんのこと、自らに疑問点を探り出し、自身でも真摯な研究態度を求める。もちろん課題のプレゼンは必須である。

使用教材

必要なプリントの配布

参考文献は必要に応じて指示する。

評価方法

出席点と提出物への取り組みによる総合評価

提出物の返却後、受講学生との討論会を行い、疑問点を解決する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

すくなくとも、修士課程までに、「言語学概論」に相当する科目を履修していること。

オフィス・アワーは、毎週火曜日・水曜日・金曜日のお昼休み時間に設定する。

メール等を活用しつつ、質問・相談にはできる限り随時、対応する。

前年度の授業評価

前年度登録学生なし。

科目名	担当者名	開講学期	単位
欧米語学特殊研究Ⅲ(米文学)	森 孝晴	後期	2

ナンバリングコード

D_INT619300

使用言語

受講者決定後に使用言語(日本語又は英語)を決定する授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

高い分析力や鋭い発想で他の研究者にできない発見や解釈を提示する

概要

アメリカの近代小説、とりわけ発展期のリアリズム小説を検討していく。その際、新しい批評理論を念頭に置きつつ、時代背景や社会的要因を詳細に調査・検討しながら、様々な作品を熟読し比較・分析して、作品に対する新しい視点を獲得することを目指す。こうした考察を経てアメリカリアリズム文学の特性と存在意義を把握していくことになる。学生のレポートや口頭発表をめぐって活発な議論を構築する。レポートや発表に対しては、問題点の指摘や評価点について授業の場で随時フィードバックしていく。

キーワード

アメリカ小説、特にジャック・ロンドンを中心とするアメリカ自然主義文学研究の深化、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

アメリカの近代リアリズム小説を深い地点まで比較・分析することにより、リアリズム文学作品を高度に研究し新しい発想を獲得できるようになる。

授業計画

- 第1回 アメリカ近代リアリズム小説概観・解説(自然主義文学「ロンドン、ノリス」)
- 第2回 アメリカ近代リアリズム小説概観・解説(自然主義文学「クレイン、ドライサー」)
- 第3回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドン作品—小説読解)
- 第4回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドン作品—小説解釈)
- 第5回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドン作品—小説分析)
- 第6回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやクレインの作品—比較読解・解釈)
- 第7回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやクレインの作品—比較分析)
- 第8回 作品レポート発表(ロンドンやクレインの文学)
- 第9回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやノリスの作品—比較読解)
- 第10回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやノリスの作品—比較解釈)
- 第11回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやノリスの作品—比較分析)
- 第12回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやドライサーの作品—比較読解・解釈)
- 第13回 アメリカ近代リアリズム小説購読(ロンドンやドライサーの作品—比較分析)
- 第14回 作品レポート発表(ロンドンやノリスやドライサーの文学)
- 第15回 アメリカ近代リアリズム小説総括

授業の予習・復習

授業前には、指示されている文献や作品を深く読み込み、発表できる準備をしておくこと

使用教材

授業の中で指示・案内する。

評価方法

平常点40%、授業における発表内容30%、レポート内容30%。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

メールやラインなども活用して、質問・相談にはできる限り随時対応する。常に受講生の意見や希望を聴き、できるだけ研究に集中できるよう配慮する。メールアドレスはmoritaka@int.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

受講生は満足してくれている。

科目名	担当者名	開講学期	単位
近・現代ヨーロッパ表象文化特殊研究	飯田 伸二	前期	2

ナンバリングコード

D_INT613615

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

文学作品とメディア

概要

モリエールの『ドン・ジュアン』を始めとする文学作品が、オペラ、映画、漫画といった他のメディアに書き換えられる際に、どのような変化が生じうるのかを多角的に考察します。

キーワード

文学, メディア, 歴史, 表象

授業の到達目標

文学作品と歴史, 発表形態, メディアの関係を考察し, 考察から得られた知見を作品分析に活かせるようになることを目指します。

授業計画

大学院博士後期課程の授業なので, 授業で何よりも重視されるのは受講生の研究領域と研究方法です。この授業でも, 可能な限り受講生の要望, 研究の進捗状況に合わせて, 教材の選択, 進度については柔軟に対応する予定です。以下に提示するのはあくまで参考のための計画です。

- 1) オリエンテーション
- 2) モリエールとその時代
- 3) モリエール『ドン・ジュアン』分析(1): 欲望のメタファーとしてのドン・ジュアン
- 4) モリエール『ドン・ジュアン』分析(2): ドン・ジュアンの現代性
- 5) モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』とその時代
- 6) モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』とモリエール『ドン・ジュアン』比較
- 7) アベ・プレヴォ『マノン・レスコー』分析: 階級, 金銭, 信仰
- 8) 小説からオペラへ: プッチーニ『マノン・レスコー』
- 9) 小説から映画へ: クルゾー『マノン』
- 10) テキストとメディア
- 11) 受講生による発表と講評(1)
- 12) 受講生による発表と講評(2)
- 13) 受講生による発表と講評(3)
- 14) 受講生による発表と講評(4)
- 15) まとめ

授業の予習・復習

担当者推薦の翻訳・版については事前に指示するので, 講義で扱う作品は事前に必ず通読しておくこと。授業

の進度に応じ、適宜指示します。

使用教材

モリーエル『ドン・ジュアン』岩波文庫

アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』新潮文庫

その他の参考文献は開講時に指示します。

評価方法

平常点(発表)とレポートにより総合的に評価します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

原則として、授業の前後に対応します。iidakaba@int.iuk.ac.jpにより面談を申し込むことも可能です。

前年度の授業評価

本科目は今年度初めて開講されます。

科目名	担当者名	開講学期	単位
音楽学特殊研究	伊藤 綾	前期	2

ナンバリングコード

D_INT617607

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)、実務経験のある教員による授業科目(論文執筆、翻訳および講演の実務経験を有する)

テーマ

外国語文献読解

概要

博士論文研究に関わる外国語先行研究および参考文献を読み解き考察、まとめる。

キーワード

文献読解、アクティブ・ラーニング、音楽学、音楽史

授業の到達目標

- ・博士論文研究に必要な先行研究・参考文献を精査することができる。
- ・外国語の先行研究・参考文献を正しく読み理解することができる。
- ・読解した先行研究・参考文献をまとめることができる。
- ・先行研究・参考文献を自らの研究に活かすことができる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 読解先行研究と参考文献の決定
- 第3回 先行研究1-第1章読解
- 第4回 先行研究1-第2章読解
- 第5回 先行研究1-第3章読解
- 第6回 先行研究2-第1章読解
- 第7回 先行研究2-第2章読解
- 第8回 先行研究のまとめ発表
- 第9回 参考文献1-第1章読解
- 第10回 参考文献1-第2章読解
- 第11回 参考文献1-第3章読解
- 第12回 参考文献2-第1章読解
- 第13回 参考文献2-第2章読解
- 第14回 参考文献2-第3章読解
- 第15回 参考文献のまとめ発表

授業の予習・復習

文献の量を正しく認識し、毎回の読解に向けて計画的に翻訳準備をすること。手直しの入った翻訳はまとめておくこと。

使用教材

使用文献は講義内に決定する。

評価方法

毎回の発表内容50%、提出物50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・質問は基本的に講義時間内に行うこと。
- ・講義時間以外での質問・相談等はメールあるいはオフィスアワーの時間に受け付ける。
- ・毎回の課題ならびにレポート等については指導・返却するので、必ず確認の上、さらに研究を深めること。
- ・オフィスアワー: 事前に直接あるいはメール(a-ito@int.iuk.ac.jp)で連絡のこと。

前年度の授業評価

前年度は開講されなかった。

科目名	担当者名	開講学期	単位
日本史特殊研究	太田 秀春	後期	2

ナンバリングコード

D_INT612100

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

史料分析・原典講読等を通した日本史の研究

概要

歴史を研究する上で史料を扱う技能は、必ず習得しておくべき技能のひとつである。この授業では、それぞれの研究テーマに関連性のある重要な史料を選び、その史料についての読み込みと分析を通して、自身の研究中の位置づけや解釈をおこなう。

なお、履修に際しては同分野の開講科目である、日本史特殊講義Ⅰおよび日本史特殊講義Ⅱを履修していることが望ましい。

キーワード

日本史、歴史学、史料分析、原典講読、地域、フィールドワーク、島津氏、薩摩藩、鹿児島、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

歴史の中で残された多くの史料を活用し、その読み込みを正確におこない、そこから新たな見解や視点を導き出すことができる。

授業計画

- 第1回 授業の導入
- 第2回 史料の選択(時代・分野)
- 第3回 史料の選択(時代・分野の絞り込み)
- 第4回 史料の分析Ⅰ(概要把握)
- 第5回 史料の分析Ⅱ(内容分析と解釈)
- 第6回 史料の分析Ⅲ(概要把握)
- 第7回 史料の分析Ⅳ(内容分析と解釈)
- 第8回 史料の分析Ⅴ(研究・論文へ)
- 第9回 周辺史料の選択
- 第10回 周辺史料の分析Ⅰ(概要把握)
- 第11回 周辺史料の分析Ⅱ(内容分析と解釈)
- 第12回 周辺史料の分析Ⅲ(概要把握)
- 第13回 周辺史料の分析Ⅳ(内容分析と解釈)
- 第14回 周辺史料の分析Ⅴ(研究・論文へ)
- 第15回 まとめ

※受講者の研究や論文作成の進捗によって内容が大きく変わるので、受講生の個々人に合わせたマンツーマンの指導で、1回ごとの内容よりも全体としての流れを重視し柔軟に対応したい。

授業の予習・復習

適宜発表を行うので、その事前準備を悉皆とおこなうこと。
原典や史料講読の場合は事前に指定された史料や箇所をまとめてくること。

使用教材

授業中に適宜指示する。

評価方法

発表50%、レポート30%、フィールドワーク(現地調査等を含む)20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・懇談時間などは、適宜研究室で対応・実施する。

前年度の授業評価

開講せず

科目名	担当者名	開講学期	単位
比較考古学特殊研究	大西 智和	後期	2

ナンバリングコード

D_INT612025

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

考古学における多面的比較研究の実践

概要

考古学において、研究対象とする資料や地域を相対化するために、「比較」の視点は非常に重要である。この授業では、考古学における多面的な「比較」研究を実践する。とくに、日本列島に展開した古墳時代の文化と社会を主たる素材とし、多様な古墳文化を生じさせることになった社会を理解するために、他地域間比較や時間的比較の理論や方法を用いることによって、新しい解釈を得るプロセスを共有する。なお、実践に際しては、欧米での研究例も視野に入れる。さらに、受講者の研究テーマも取り上げ、比較研究の実践による新しい解釈を模索する。

新しく発表された単行本や論文、とくに、外国語の文献に注目し、各自の研究にそれらの中で示された成果を、どのように生かせるのか議論することに重点を置く。

キーワード

比較考古学、考古学理論、古墳時代、物質文化、アクティブ・ラーニング、実務経験のある教員による授業(発掘調査)

授業の到達目標

- 多面的な比較研究を遂行できる。
- 新しい理論を自分の研究に応用できる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 古墳時代の比較研究について
- 第3回 古墳・墳墓の比較(地域の中での比較)
- 第4回 古墳・墳墓の比較(中央と地方との比較)
- 第5回 古墳・墳墓の比較(日本と海外との比較)
- 第6回 物質文化の比較(石器)
- 第7回 物質文化の比較(土器)
- 第8回 物質文化の比較(金属器)
- 第9回 都市と村落(日本)
- 第10回 都市と村落(海外)
- 第11回 中央と地方(古墳時代まで)
- 第12回 中央と地方(古代以降)
- 第13回 社会の発展(古墳時代まで)
- 第14回 社会の発展(古代以降)
- 第15回 まとめ(比較文化論とは)

授業の予習・復習

授業前には指定されたテキストや参考文献をよく読んでおくこと。毎授業後には授業の内容に関連するレポートを提出すること。

使用教材

テキストや参考文献は授業の中で適宜紹介する。

評価方法

授業・課題への取組状況(60%)、レポート(40%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問などには随時対応する。メール(onishi@int.iuk.ac.jp)でも対応する。

オフィスアワーは金曜日3・4限に設けている。

提出されたレポートにはコメントを付して返却する。

前年度の授業評価

受講者がなかったため開講せず。

科目名	担当者名	開講学期	単位
情報・理論考古学特殊研究	中園 聡	前期	2

ナンバリングコード

D_INT612025

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

考古学理論と方法の開拓・応用

概要

考古学の新時代を開拓していくには、既存の諸理論を理解することはもとより、積極的な理論化を行う意志・力を養う必要がある。そこで、本科目は理論考古学と情報考古学を主としてとりあげ、検討を行う。理論考古学的検討としては、既存の考古学の諸理論間の関係を明らかにするとともに、認知科学・進化心理学などの新しい動向との比較や関連性の把握と応用の可能性を探る。さらに、理論の運用と密接に関連する方法論として情報考古学、すなわち研究へのコンピュータの利用のあり方に対する深い理解と思想が必要であり、それについても検討する。これらを総合して新理論構築の試みを提示するものである。

※これは単なる講義ではない。双方向的な議論を重視し、新理論構築への積極果敢な挑戦を期待する。欧米考古学の理論を柔軟に検討し日本考古学を批判的に検討するだけでなく、欧米考古学の理論的葛藤を超える最先端の理論の着想につながるよう、教員と切磋琢磨して取り組むものと理解されたい。

※科学史・現代思想などは教養としてあらかじめ身につけておくべきである。また、認知諸科学をはじめ、サイエンスの最新の動向の把握は教養人・研究者として必須であり、常に努力すべきである。

キーワード

理論考古学、情報考古学、認知考古学、科学史、人文科学、自然科学、倫理、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1) 考古学の諸理論の理解を踏まえ、レビューできる。2) 考古学の理論・方法について高次かつオリジナルな観点から批判できる。3) 考古学の新しい理論・方法構築のための素養を身につけることができる。4) 広く関連諸科学の中に考古学を位置づけ、将来の発展性を述べることができる。

授業計画

1 理論考古学的検討

第1回 日本考古学の理論・方法と研究構造に対する批判的分析(1):研究者と教育環境

第2回 日本考古学の理論・方法と研究構造に対する批判的分析(2):学界と学問構造

第3回 欧米考古学の理論・方法と研究構造の検討(1):科学性と論理

第4回 欧米考古学の理論・方法と研究構造の検討(2):研究と倫理

第5回 欧米考古学の理論・方法と研究構造の批判的分析:processual archaeology と postprocessual archaeology

第6回 欧米考古学の理論・方法と研究構造の批判的分析:"PPP"

第7回 考古学の認知科学

第8回 考古学と進化心理学

2 情報考古学的検討

第9回 情報考古学の現状と批判的検討(1):数量化と数理

- 第10回 情報考古学の現状と批判的検討 (2):空間分析と可視化
- 第11回 情報考古学の未来像
- 3 考古学理論の構築
 - 第12回 新理論の構築の可能性(1):その必要性と意義
 - 第13回 新理論の構築の可能性(2):具体的な検討
 - 第14回 新理論の構築へ向けて
- 4 総括
 - 第15回 総括的議論

授業の予習・復習

授業前には次回授業で使用されるとみられる用語を調べるなど基礎的準備を済ませておくこと。授業後には指示された課題に取り組むほか、用語や考え方を咀嚼するよう努めること。授業前後に必ず合計で4時間程度の予習復習を行うこと。

使用教材

- 安齋正人(1996)『現代考古学』柏書房
- Hodder,I., S. Hutson (2003). Reading the Past: Current Approaches to Interpretation in Archaeology. (3rd edition). Cambridge University Press.
- Matsumoto, N., Bessho H. and Tomii M. editors (2011). Coexistence and Cultural Transmission in East Asia. Left Coast Press.
- Miller, D. (1985). Artefacts as Categories: A Study of Ceramic Variability in Central India. Cambridge University Press.
- 中園聡(2004)『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- 松本直子・中園聡・時津裕子編(2003)『認知考古学とは何か』青木書店
- S.ミズン(1998)『心の先史時代』青土社
- S.ミズン(2006)『歌うネアンデルタールー音楽と言語から見るヒトの進化一』早川書房

評価方法

平常点:議論の際に論理で私を言い負かすことができるか(30%)、学界・考古学の方法や理論への批判力(30%)、理論の理解度と新理論構築への積極性(40%)。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

双方向的議論を平素から行うよう互いに務めたい。時間外であっても新しい着想や疑問があれば常に相談・議論に応じる。メールはnakazono@int.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

専門的で高度な内容であるが、幸い受講生の関心が高いためこれまで助かっている。学生の能力がさらに磨かれるよう尽力したい。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	飯田 伸二	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語もしくはフランス語

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

近現代ヨーロッパの表象文化

概要

研究論文指導

キーワード

表象文化, テキスト分析, 論文執筆, テーマ設定, 先行研究

授業の到達目標

博士論文執筆の準備・執筆を通じ、研究者に必要な知見、問題設定能力、論文執筆力の習得を目指します。

授業計画

- 1) オリエンテーション: 博士論文とは
- 2) 優れた研究とは(1)
- 3) 優れた研究とは(2)
- 4) 優れた研究とは(3)
- 5) テーマ設定に向けて(1): 先行研究に学ぶ
- 6) テーマ設定に向けて(2): 先行研究に学ぶ
- 7) テーマ設定に向けて(3): 先行研究に学ぶ
- 8) 受講生による研究発表と討論(1)
- 9) 受講生による研究発表と討論(2)
- 10) 受講生による研究発表と討論(3)
- 11) 受講生による研究発表と討論(4)
- 12) 受講生による研究発表と討論(5)
- 13) 受講生による研究発表と討論(6)
- 14) 受講生による研究発表と討論(7)
- 15) まとめ: 夏季休暇中の研究方針
- 16) 夏季休暇中の研究報告(1)
- 17) 夏季休業中の研究報告(2)
- 18) 研究発表もしくは論文添削・講評(1)
- 19) 研究発表もしくは論文添削・講評(2)
- 20) 研究発表もしくは論文添削・講評(3)
- 21) 研究発表もしくは論文添削・講評(4)
- 22) 研究発表もしくは論文添削・講評(5)
- 23) 研究発表もしくは論文添削・講評(6)

- 24) 研究発表もしくは論文添削・講評(7)
- 25) 研究発表もしくは論文添削・講評(8)
- 26) 研究発表もしくは論文添削・講評(9)
- 27) 研究発表もしくは論文添削・講評(10)
- 28) 研究発表もしくは論文添削・講評(11)
- 29) 研究発表もしくは論文添削・講評(12)
- 30) まとめ:1年間を振り返って+次年度への展望

授業の予習・復習

受講生自身が研究テーマに応じて、必要な課題を見つけ研究を進めてください。研究の進度、論文の準備中の問題に応じて、適宜相談に応じます。

使用教材

開講時に受講生の研究テーマ、研究方法に応じて、適宜指示する。

評価方法

平常点(発表, 提出課題など)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

原則授業前後に対応します。それ以外の場合は, iidakaba@int.iuk.ac.jpを通じ連絡ください。

前年度の授業評価

今年度初めて開講。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	伊藤 綾	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)、実務経験のある教員による授業科目(論文執筆、翻訳および講演の実務経験を有する)

テーマ

博士論文執筆に向けた資料収集と分析およびその発表

概要

本演習では第1段階として、博士論文の執筆に向けての資料及び文献収集とその取捨選択、重要な情報とそれに関する所見をまとめる。第2段階として、先行研究を参考に研究対象作品を分析・考察するとともに、論文の核となる新しい視点との関連性をまとめる。第3段階では、論文の中心となる新たな視点を論理的に展開しまとめる。

各段階の最後では、研究成果の発表およびディスカッションを行うことにより、研究を見直し深めていく。

この演習では、発表を通して自分の研究を第三者に正しく伝える力を養うことはもちろんだが、他の生徒の研究結果を聞くことにより、音楽を専門に研究するものとしての知識を広げるとともに、積極的にディスカッションすることにより学生自身の力で新しいアイデアが創出していくことを期待する。

キーワード

資料収集、文献読解、西洋音楽史、日本音楽史、ディスカッション、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・先行研究を正しく理解することができる。
- ・論文の核となる視点を見つけ、自らの考えを論理的に展開することができる。
- ・作品の成立背景、時代背景、社会状況を理解することができる。
- ・論理的な作品解釈をすることができる。
- ・音楽作品解釈の様々な可能性を理解できる。
- ・各作品の特徴を自らの言葉で第三者に伝えることができる。
- ・作品に関する情報と自らの解釈を融合し、演奏表現につなげることができる。

授業計画

- 第1回 研究科論集投稿論文の発表と校正(第1章)
- 第2回 研究科論集投稿論文の発表と校正(第2章)
- 第3回 研究科論集投稿論文の発表と校正(第3章)
- 第4回 研究科論集投稿論文要旨の発表と校正
- 第5回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第1曲)
- 第6回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第2曲)
- 第7回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第3曲)
- 第8回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第4曲)
- 第9回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第5曲)
- 第10回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第6曲)
- 第11回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第7曲)

- 第12回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第8曲)
- 第13回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第9曲)
- 第14回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第10曲)
- 第15回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第11曲)
- 第16回 前期のまとめと後期の研究計画
- 第17回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第12曲)
- 第18回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第13曲)
- 第19回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第14曲)
- 第20回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第15曲)
- 第21回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第16曲)
- 第22回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第17曲)
- 第23回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第18曲)
- 第24回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第19曲)
- 第25回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第20曲)
- 第26回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第21曲)
- 第27回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第22曲)
- 第28回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第23曲)
- 第29回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第24曲)
- 第30回 楽曲分析結果の発表(R.シューマン《ミルテの花》第25曲)

授業の予習・復習

自分の発表日に向けて計画的に研究と準備をすること。発表後はディスカッションで出た意見を踏まえて、研究をもう一度文章にまとめ直すこと。参考文献にはきちんと目を通しまとめておくこと。

使用教材

なし。必要な先行研究や文献はその都度取り寄せる。その他必要な資料はプリントで配布する。

評価方法

平常点（ディスカッションの参加度）40%、発表 60%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

発表日までに責任を持って準備すること。授業中内の積極的な質問を歓迎します。個別の相談はオフィスアワー内で受け付けます。

相談がある場合には、事前に直接あるいはメール(a-ito@int.iuk.ac.jp)で連絡をしてください。

毎回の課題ならびにレポート等については指導・返却するので、必ず確認の上、さらに研究を深めてください。

前年度の授業評価

開講されなかった。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	太田 秀春	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)、アクティブラーニング

テーマ

博士論文の作成と、研究者として必要な多様なスキルの修得

概要

授業の到達目標にあるように、基本的には博士課程を修了するのに、ふさわしい能力を習得することを目的とする。そのために、研究・論文に必要な史料の読解、調査、論文の構成などについての技能を習得する。これらについては、それぞれの受講生の個別の研究テーマを分析したうえで、それらのテーマや研究内容に具体的に対応しながら指導をおこなう。

受講に際しては、日本史特殊講義Ⅰ、日本史特殊講義Ⅱ、日本史特殊研究を履修していることが望ましい。

キーワード

日本史、歴史学、博士論文、調査・分析・考察

授業の到達目標

博士課程を修了するのに、ふさわしい能力を習得することを目的とする。研究・論文に必要な史料の読解、調査、論文の構成などについてのスキルを修得し、最終的に博士論文を作成する。これらを通して、一研究者として自立し、高度な研究ができるようになる。

授業計画

・修士論文でのテーマなど、これまでの研究の成果から問題意識や課題を再確認し、その継続的な発展や新たな方向性で研究を進展させ、博士論文の作成を目指す。

- 第1回 授業の導入・進め方の検討
- 第2～3回 修士論文の課題の再検討(1)
- 第4～6回 課題に対する調査・研究・報告
- 第7～8回 修士論文の課題の再検討(2)
- 第9～11回 課題に対する調査・研究・報告
- 第11～12回 新たな進め方・課題の検討(1)
- 第13～14回 課題に対する調査・研究・報告
- 第15回 前期の中間報告
- 第16～17回 新たな進め方・課題の検討(2)
- 第18～19回 課題に対する調査・研究・報告
- 第20～25回 学会発表(投稿)用論文の作成・発表
- 第26～29回 発表会の準備
- 第30回 年間の成果報告

・課題やテーマごとの調査・分析・発表・まとめを反復し、それぞれ章や節に当たる範囲を作成し、これらが有機

的に結合していくことで、博士論文を完成させる。授業の進展具合に応じて、適宜相談の上で、研究する上で最も適したスタイルで実施する。

・受講者の研究や論文作成の進度によって内容が大きく変わるので、受講生の個々人に合わせたマンツーマン的な指導で、1回ごとの内容よりも全体としての流れを重視し柔軟に対応したい。

授業の予習・復習

定期的に章や節を発表してもらうので、その事前準備をしっかりとこなうこと。

指導後は、指導内容を修士論文に反映させるなど、自分なりに考えて対応すること。

使用教材

授業の際に適宜指示する。

評価方法

調査・研究などの活動および発表 100%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・懇談時間などについては、適宜対応するので、研究室を訪ねること。

前年度の授業評価

開講せず

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	大西 智和	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

独創的かつ自立した研究活動の実践

概要

本授業では「自立した研究活動」ができるようになることを目指し、考古学研究に寄与し得る独創性に富んだ論文の作成ができるようになることを目標とする。

受講者は各自が設定した研究計画に基づき、考古資料に基づく研究を進める。授業では基本的に研究成果の発表とそれを受けた議論を行う。それによって問題点や解明し得たことの学問領域における意義などを認識し、さらなる研究の深化につなげる。発表内容は学期ごとにレポートにまとめてもらい、論文作成法に関する指導も行う。

研究の実践に際しては、新しい考古学の理論や方法論にも関心を持ってもらう。また、関連諸科学の研究動向にも注意し、解釈に役立ててもらおう。外国語の文献も積極的に講読し、国際的な水準を見すえながら研究を進める。

キーワード

考古学の研究、考古学理論、論文作成、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標は以下のとおりである。

- ・各自が設定した研究計画に基づき、研究を進めることができる。
- ・高度なプレゼンテーションができる。
- ・新しい考古学の理論や方法論にも関心を持ち、研究に応用できる。
- ・関連諸科学の研究動向にも注意し、研究に活用することができる。
- ・独創的な論文を作成できる。

授業計画

第1回 前期オリエンテーション(授業の進め方についての説明)

第2回 修士論文の検討(先行研究・問題設定)

第3回 修士論文の検討(方法)

第4回 修士論文の検討(考察)

第5回 研究計画の検討(先行研究・問題設定)

第6回 研究計画の検討(方法)

第7回 研究計画の検討(考察)

第8回 論文1作成のために(テーマの設定)

第9回 論文1作成のために(先行研究について1)

第10回 論文1作成のために(先行研究について2)

第11回 論文1作成のために(資料について1)

- 第12回 論文1作成のために(資料について2)
- 第13回 論文1作成のために(方法について1)
- 第14回 論文1作成のために(方法について2)
- 第15回 前期のまとめ(夏季休暇中の研究の進め方について)
- 第16回 後期オリエンテーション(夏季休暇中の研究成果の発表)
- 第17回 論文1作成のために(分析結果1)
- 第18回 論文1作成のために(分析結果2)
- 第19回 論文1作成のために(考察1)
- 第20回 論文1作成のために(考察2)
- 第21回 論文1作成のために(全体をとおした議論)
- 第22回 論文1作成のために(博士論文への位置づけに関する議論)
- 第23回 論文2作成のために(テーマの設定)
- 第24回 論文2作成のために(先行研究について1)
- 第25回 論文2作成のために(先行研究について2)
- 第26回 論文2作成のために(資料について1)
- 第27回 論文2作成のために(資料について2)
- 第28回 論文2作成のために(方法について1)
- 第29回 論文2作成のために(方法について2)
- 第30回 後期のまとめ(春期休暇中の研究の進め方について)

授業の予習・復習

発表の準備を整えて授業に臨むこと。毎授業後に発表したことをレポートにまとめて提出すること。

使用教材

適宜指示する。

評価方法

授業への取組状況・授業中の研究発表(70%)、期末レポート(30%)により評価する。
提出されたレポートにはコメントを付して返却する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問などには随時対応する。メールでの問い合わせも可(onishi@int.iuk.ac.jp)。
オフィスアワーは金曜日3・4限に設けている。

前年度の授業評価

受講者がなかったため開講せず。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	杉山 朱実	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語とヨーロッパ言、およびバスク語

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

修士論文をもとに、ヨーロッパ言語とその文化的背景のさらなる研究

概要

この研究指導では「南ヨーロッパを中心とする比較言語学研究」が前提条件となる。このテーマに関連する個別テーマを修士論文で、どのように考え、作成してきたか、次にその個別テーマをどのように研究を深めていきたいかを検討し、論文作成指導を行う。

毎回テーマをもって、何に興味をもち、何を解明していきたいか、レポート提出とプレゼンを行い、その積み重ねから、論文作成への道筋を決定していく。

毎回、添削のうえ返却後、意見を出し合い検討しあい、フィードバックしていく。

キーワード

ヨーロッパ、カナダにおける言語状況、および言語環境への取り組み、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

修士論文で仕上げてきた「各自のテーマ」に沿って、どのように研究を深めていきたいのか、研究テーマの更なる研究目標を設定し、その研究目標に従って博士後期課程としての実りある研究計画を立て、真摯に研究に励み実行に移していくことを目標とする。

授業計画

第一回 修士論文で、どのようなテーマを作成してきたかの検討(1)

第二回 検証(1)

第三回 検証(2)

第四回 検証(3)

第五回 目標設定(1)

第六回 目標設定(2)

第七回 目標設定(3)

第八回 文献研究(1)

第九回 文献研究(2)

第十回 文献研究(3)

第十一回 中間発表準備(1)

第十二回 中間発表準備(2)

第十三回 中間発表

第十四回 中間発表の反省点の確認

第十五回 文献研究(1)

第十六回 文献研究(2)

- 第十七回 文献研究(3)
- 第十八回 文献研究(4)
- 第十九回 文献研究(5)
- 第二十回 中間発表
- 第二十一回 中間発表の反省点の分析
- 第二十二回 論文作成計画(1)
- 第二十三回 論文作成計画(2)
- 第二十四回 論文作成計画(3)
- 第二十五回 論文作成の詳細指導(1)
- 第二十六回 論文作成の詳細指導(2)
- 第二十七回 論文作成の詳細指導(3)
- 第二十八回 論文発表準備(1)
- 第二十九回 論文発表準備(2)
- 第三十回 論文発表

授業の予習・復習

毎回の講義で出される課題について、真摯に取り組み、課題発表およびプレゼンを重ね、博士論文への道筋を構築していくこと。課題への取り組みが大事である。

使用教材

各自のテーマが異なるため、論文の制作過程で適当な指示を与える。

評価方法

講義への取り組み姿勢、論文との総合評価

論文作成へ向けてのレポート作成を毎回提出させて、返却後、疑問点を討論し、課題解決に向けていく。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

博士論文への取り組みは、真摯に学問への追及を行う最高レベルでの学問研究であるところを自覚し、肝に銘じた学生の指導を行う。

オフィス・アワーについては、毎週火曜日・水曜日・金曜日のお昼休みとする。

メール等を活用しつつ、質問・相談にはできる限り随時、対応する。

前年度の授業評価

前年度登録学生はなし。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	戦 慶勝	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

専門演習、論文・研究指導

テーマ

テーマ: 博士論文指導

概要

第一言語は第二言語の学習にマイナスに影響する場合(負の転移)もあれば、プラスに影響する場合(正の転移)もある。第一言語と目標言語における類似点や相違点を知っておけば、理解できる内容がいつそう豊かになり、目標言語の本質がよりよく浮かびあがってくる。いかにして目標言語を能率的に習得し、しかも母国語による干渉を最小限にするかということは対照研究の課題であるが、どんな方法で中国語と日本語の対照研究を行うか、ということは研究成果いかんにかかわる問題である。目標言語と母国語の相違について認識し、さらに言語の多様性の根底にある類似性や普遍性を理解するには、多元的な立場に立って言語の諸現象を説かなければならない。この演習では受講生と一緒に文献研究を行い、ゼミ発表と合わせて卒論の具体的な執筆方法などを指導する。

キーワード

語学的研究、習得研究、意味的分布、統語的分布、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

テーマ: 対照研究の視点から日本語と中国語にまつわる諸現象を分析し、博士論文を完成させる。

授業計画

- 第1～2回 オリエンテーション(研究テーマの再確認)
- 第3～4回 文献研究Ⅰ
- 第5～6回 文献研究Ⅱ
- 第7～8回 文献研究Ⅲ
- 第9～10回 文献研究Ⅳ
- 第11～12回 文献研究Ⅴ
- 第13～14回 卒論の章立ての検討
- 第15～16回 口頭発表(問題意識の確認)
- 第17～18回 研究発表(章立て、節立てに関する指導を行う)
- 第19～20回 研究発表(論文に関する具体的指導)
- 第21～22回 研究発表(論文に関する具体的指導)
- 第23～24回 文献研究Ⅵ
- 第25～26回 文献研究Ⅶ
- 第27～28回 文献研究Ⅷ
- 第29～30回 研究発表(論文に関する具体的な指導を行う)

授業の予習・復習

配布資料を必ず読んでおくこと。教員のコメントを整理しておくこと。

使用教材

参考文献:①渡辺 実(1996)「日本語概説」岩波テキストブックス

②仁田義雄(1989)「日本語のモダリティ」くろしお出版

③益岡 隆志(2007)「日本語モダリティ探求」くろしお出版

④迫田 久美子(2002)「第二言語習得研究」アルク

⑤森田良行(2002)「日本語文法の発想」ひつじ書房

⑥石綿 敏雄・高田 誠(1998)「対照言語学」おうふう

⑦戦 慶勝(2016)「中国語と日本語における目的表現の対照研究」

評価方法

投稿論文や学会発表などに基づいて総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

研究発表に関する教員のコメントを整理しておくこと。研究に関する相談だけではなく悩みの相談も対応する。

前年度の授業評価

実施しなかった。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	中園 聡	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

考古学における理論構築

概要

本演習においては、博士の学位取得を目指す院生に対する総合的な研究指導を行う。博士論文のテーマや研究方法、博士論文作成スケジュールなどについては、あらかじめ十分な相談を行う。博士後期課程在学中の院生が国内・国外の学会で研究発表すること、学術雑誌に論文・翻訳その他の研究業績を投稿することなどを通じて、段階的・体系的に博士論文を作成できるように指導・協力する。

授業方式は演習形式であり、各人の研究テーマに関連するプレゼンテーションとディスカッションを中心とする。これは博士論文のための研究の進行状況のチェックでもある。

博士論文作成の前提として、研究論文の学会誌への投稿(もちろん受理・掲載)や学会発表(口頭発表・ポスター発表)を積極的にしておくべきであることはいままでもない。そうした活動は博士論文作成においても有効に作用するだけでなく、ディスカッションや他の研究者とのかけひきなどをも包括した総合的な研究能力の獲得にも重要である。本演習に係わる指導の一環として、World Archaeological Congressをはじめ様々な国際会議や、日本考古学協会、日本文化財科学会などをはじめとする国内学会での積極的な発表を奨励する。併せて日本学術振興会や各種財団などの競争的資金の獲得への取り組みについても奨励する。

キーワード

考古学研究、考古学理論、論文、学会、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1) 考古学的に研究者として独立した研究が行える力を身につけることができる。または、1') 考古学的素養を身につけることで高度な専門家として社会で活動する力を身につけることができる。2) 学会等でのプレゼンテーションや論文発表をし、評価を得ることができる。

授業計画

1年次前期(第1回～第15回):研究テーマの決定を行ったのち、研究計画書の内容に沿った研究を開始する。成果は本演習において発表する。学会発表・論文発表等の技術や研究戦略についても併せて指導を行う(これについては、これ以降も継続する)。研究費の申請方法や申請書の書き方の指導も行う。

第1回 オリエンテーション、研究テーマ/第2回 研究テーマと研究計画書/第3回 詳細な研究計画/第4回 研究戦略の検討1:相談・申請書等の書き方/第5回 研究戦略の検討2:議論/第6回 研究戦略の検討3:具体的指導/第7回 研究内容の発表と議論/第8回 第1回口頭発表(院生等参加)/第9回 研究計画・研究戦略の再検討/第10回 論文発表の計画/第11回 論文内容の検討/第12回 論文内容の再検討/第13回 口頭発表の計画/第14回 口頭発表内容の検討/第15回 論文投稿指導

1年次後期(第16回～第30回):成果発表、討論に重点をおいた演習。研究計画書の内容に沿った研究を継続して実施する。

第16回 投稿論文の検討／第17回 第2回口頭発表(院生等参加)／第18回 関連分野の研究の動向／第19回 関連分野の研究の吟味／第20回 研究内容の再検討／第21回 第3回口頭発表(院生等参加)／第22回 論文執筆構想について／第23回 発表論文または口頭発表についての指導／第24回 発表論文または口頭発表についての具体的検討／第25回 研究活動全体の再検討／第26回 異なる分野の研究動向の検討／第27回 異なる分野の研究と自らの研究との比較／第28回 論文執筆構想の再検討／第29回 第4回口頭発表(院生等参加)／第30回 1年時の研究の総括

2年次前期(第31回～第45回):論文執筆構想の具体化を図りつつ研究を継続し、成果を本演習において発表する。

2年次後期(第46回～第60回):前期に継続して論文執筆構想を練り、成果を本演習において発表する。

3年次前期(第61回～第75回):博士論文執筆に取り組むが、執筆過程での成果の発表を本演習で行う。論文内容については打ち合わせ・討論を行いながら、博士論文にふさわしいものへと仕上げていく。

3年次後期(第76回～第90回):博士論文を完成させるための集中的指導を行うとともに、学術研究を自立して行うあるいは高度に専門的な職業に就くための諸指導も行う。

以上が主要な計画であるが、受講者各人のテーマ・計画に沿いつつ柔軟な指導を行っていく。

授業の予習・復習

授業前には次回授業で使用されるとみられる用語を調べるなど基礎的準備を済ませておくこと。授業後には指示された課題に取り組むほか、用語や考え方を咀嚼するよう努めること。授業前後に必ず合計で4時間程度の予習復習を行うこと。

使用教材

執筆全般にかかわって参考とすべきものとして、下記の少なくとも1冊は持つておくこと。

APA(2001). Publication Manual of the American Psychological Association (5th edition). The American Psychological Association.

APA(アメリカ心理学会)(2004).『APA 論文作成マニュアル』(江藤裕之・前田樹海・田中建彦訳)医学書院

評価方法

平常点:各期の目標の達成度(20%)、プレゼンテーションとディスカッションの高度さ(20%)、論文発表・学会発表への積極的な取り組み(20%)、学界・考古学の方法や理論への批判力(30%)、日常的な研究への取り組み(10%)。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

双方向的議論を平素から行うよう互いに務めたい。時間外であっても、新しい着想や疑問があれば相談・議論に応じる。また、日頃から論文や文献等の収集、研究動向の把握などに努めてもらいたい。特にデータベース等を利用した論文の分析や研究動向の分析、文献管理等は必要な素養といえる。メールはnakazono@int.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

専門的で高度な内容であるが、幸い受講生の関心が高いためこれまで助かっている。学生の能力がさらに磨かれるよう尽力したい。

科目名	担当者名	開講学期	単位
国際文化研究指導	森 孝晴	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_INT710027

使用言語

受講者決定後に使用言語(日本語又は英語)を決定する授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

アメリカ自然主義文学を中心として多くの作品や先行論文を読み込むことにより、博士論文を書くにふさわしい分析力や発想力を獲得していく。

概要

ジャック・ロンドンを中心として、多くのアメリカ自然主義文学の小説作品を読み込むとともに、社会的・時代的背景に関わらせて先行論文を参照しつつ深く読み解き、高度の議論をし批評していく。それに並行して副指導教員とも連携しながら博士論文の作成スケジュールを作り、これを実行して行けるような指導が順次行われる。なお、その過程の中で学生が学会誌に投稿したり研究発表したりすることが奨励され、そのための指導も必要に応じて行われる。学生のレポートや口頭発表に応じて高度で活発な議論を構築する。レポートや発表については、問題点や評価点の指摘やアドバイスを授業の中で随時行い、フィードバックしていく。

キーワード

アメリカ自然主義小説、特にジャック・ロンドンの研究についての論文執筆、及び発表、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

アメリカ近代のリアリズム小説について自立した研究者として独自の視点で批評できるようになる

授業計画

- 第1回 修士論文やこれまでの研究の総括
- 第2回 博士論文執筆に向けての研究計画の検討—主題と問題意識について
- 第3回 博士論文執筆に向けての研究計画の検討—論文構成の概要について
- 第4回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの動物小説)
- 第5回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの未来小説)
- 第6回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの社会小説)
- 第7回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの農業小説)
- 第8回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの古代小説)
- 第9回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンのボクシング小説)
- 第10回 研究発表と論文投稿の実施(ロンドンの小説について)
- 第11回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの海洋小説)
- 第12回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンのアラスカもの)
- 第13回 レポート発表と総合討論(ロンドンの小説について)
- 第14回 研究発表と論文投稿の実施(ロンドン文学について)
- 第15回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの日本もの—執筆人生前期)
- 第16回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンの日本もの—執筆人生後期)
- 第17回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンのアジアもの)
- 第18回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンのハワイもの等)

- 第19回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンのノンフィクションールポルターージュなど)
- 第20回 作品購読と批評研究・資料収集(ロンドンのノンフィクションーエッセイ、論文など)
- 第21回 作品購読と批評研究・資料収集(周辺作家の文学ークレイン、ノリスなど)
- 第22回 作品購読と批評研究・資料収集(周辺作家の文学ードライサー、アンダーソンなど)
- 第23回 研究発表と論文投稿の実施(博士論文に向けてのテーマに即して)
- 第24回 博士論文完成に向けての論文構成の確認一章だてと進行状況
- 第25回 博士論文完成に向けての論文構成の確認ー流れと論点について
- 第26回 博士論文完成に向けての各章点検と結論の検討ー実証性について
- 第27回 博士論文完成に向けての各章点検と結論の検討ー全体構成について
- 第28回 博士論文完成直前の全体の内容と形式の点検と確認ー表紙、タイトル、目次など
- 第29回 博士論文完成直前の全体の内容と形式の点検と確認ー資料、印刷・製本など
- 第30回 博士論文提出の指導と今後の研究計画と課題の確認

授業の予習・復習

授業前には、指示されている資料や作品、そしてそれ以外の資料等も深く検討し、発表・報告に備えること

使用教材

指導の中で適宜指示する。

評価方法

平常点40%、レポート30%、研究発表30%。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

メールやラインなども活用して、常に受講生の意見や希望を聴いて、研究に集中できるよう配慮する。いつでも相談に乗れる体制を準備する。メールアドレスはmoritaka@int.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

受講生は満足してくれている